

アフリカ理解プロジェクト〔メディアインパクト調査〕

【調査概要】

アフリカ理解プロジェクトは、アフリカンフェスタ 2008 の来場者を対象に、「アフリカを題材とした具体的な視聴覚素材によるインパクトを調査する」ことを目的としたアンケート調査をおこなった。

その調査視点は、以下 3 点である。

1. アフリカを題材とした映画・テレビ番組の視聴有無
2. 映像を視聴したことによる関心の変化・内容・指向性
3. 映像を視聴したことによる行動の変化

実施場所:アフリカンフェスタ 横浜赤れんが倉庫

実施日時:2008 年 5 月 18 日(土)・19 日(日)

調査対象:アフリカンフェスタ 来場者

調査目的:アフリカを題材とした具体的な視聴覚素材について、対象者の視聴の有無や関心の方向性によってそのインパクトを調査すること。

調査方法:15 名の日本人の調査者による、日本語・英語のどちらかでアンケート式調査

有効回答:152

分析者 :山崎瑛莉

【回答者基本情報】

回答者 152 名のうち、20 代から 30 代が圧倒的に多く全回答者中約 70 パーセントを占める。女性が 95 名、男性が 57 名と、女性のほうが多い。職業では、会社員が 53 名と最も多い。次いで「その他」が多く、その 46 名の中には主婦、パート、事務職などがあつた。一方で、国際公務員や映画関係者からの回答は得られなかったが、メディアに対してより一般的な視点に立った結果をみることができるといえるだろう。中学生や高校生は合わせて 3 名と少なく、アフリカンフェスタ自体への参加者の偏りもあるのではないかと推測される。また、国籍別では日本人が 139 名、日本人以外が 13 名という結果であつた。日本国籍以外の内訳は、アフリカ州 7 名、欧州 3 名、アジア州 3 名である。滞在理由は「その他」が多く、結婚や NGO 活動という回答がみられた。アンケート内容は日本における視聴覚素材のインパクト調査を目的としていたため、日本人以外に回答を求めにくいという点は、日本人国籍以外の回答者数の少なさの原因と考えられる。

【分析結果】

◆視聴内容

アフリカを題材とした映画・テレビ番組の視聴有無は、全体で「有」が142名と約95%、「無」が10名と約5%であった。項目は、アカデミー賞受賞などで話題になった2006年度の作品等を中心に、映画13本(うちアニメ映画2本)、一般の人々が視聴可能な公共放送(NHK)と民間放送のテレビ番組4本、計17本にくわえ、「その他」を含め20項目を設定した。回答は複数可としたため、結果の合計数は延べ数である。

映画はアニメ映画の『ライオンキング』が最も多く選択された。そのあと『ホテル・ルワンダ』、『ブラッドダイヤモンド』と続く。テレビ番組は、『世界ウルルン滞在記』が約半数と最も多く、『NHK 世界遺産』39%、『あいのり』28%と次いでいる。

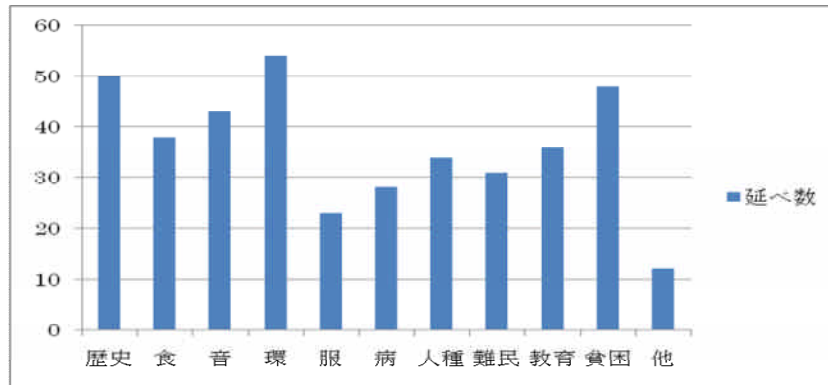
〈表1〉 全体 視聴の合計対比

名称	選択数	割合
ホテルルワンダ	46	30%
ツオツイ	17	11%
輝く夜明けに向かって	2	1%
約束の旅路	4	3%
ブラッドダイヤモンド	32	21%
遠い夜明け	6	4%
ルワンダの涙	15	10%
母たちの村	8	5%
ダーウインの悪夢	11	7%
ナイロビの蜂	19	13%
ラストキング・オブ・スコットランド	10	7%
ライオン・キング	50	33%
キリクと魔女	12	8%
NHK 世界遺産	59	39%
世界ウルルン滞在記	79	52%
NHK BS-hi特集	23	15%
その他ドキュメンタリー	28	18%
あいのり	43	28%
その他バラエティ	4	3%

◆アフリカへの関心の変化・内容

アフリカを題材とした映画やテレビ番組を観ることにより、アフリカに対する関心が高まったか否か、また、高まったとすればどのような内容であるか、ということについて問うた。アフリカに対する関心は、133名つまり約87%の人が高まったと答えており、高まらなかったという人の19名を大きく上回っている。その内容は、貧困や飢餓といったアフリカが抱える課題や食や音楽といった文化にわたる項目を提示したところ、「環境」がもっとも多く、次いで「歴史」「貧困」という結果となった。また、関心が高まらなかったと答えた理由に、「自分がどうにかできる問題ではない」というものがあつた。

〈図 1〉 関心内容 選択述べ数



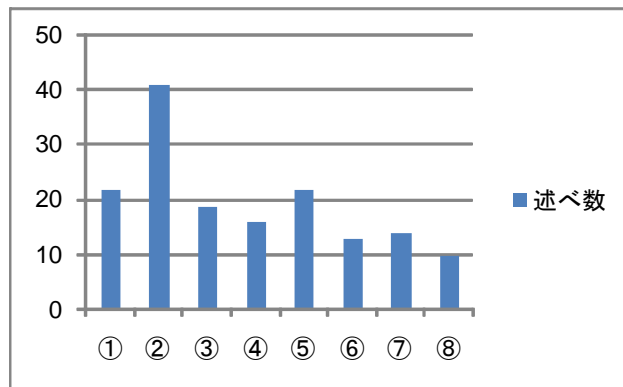
◆映画・テレビ番組を観たことによる行動

調査では、映画やテレビ番組を観たことによる行動の変化も問うた。「映画・テレビ番組の内容を話した」という選択が最も多く、次に「アフリカの映画やテレビ番組を周りに勧めた」「アフリカ関係のイベントに参加した」という回答が続く。「講演会で話した」「映画祭を主催した」という積極的な行動もみられ、何らかの形で発信者となっていることが伺える。「イベントに参加した」22名中17名がアフリカンフェスタへの来場を挙げている。

〈図 2〉行動内容

【選択項目】

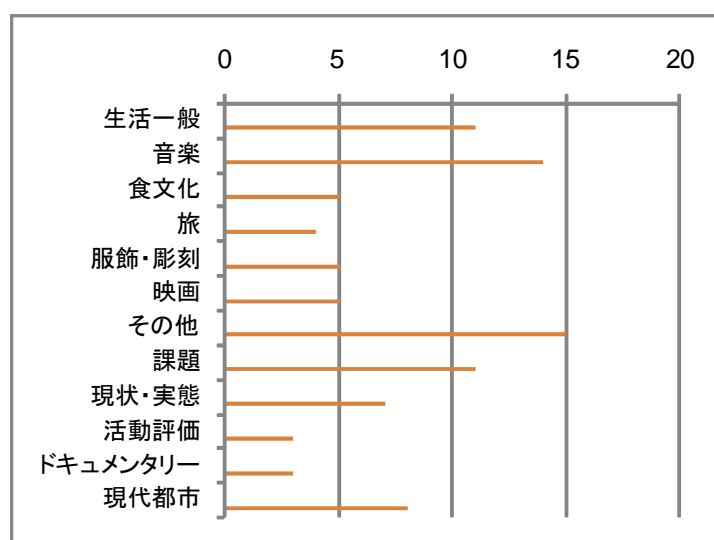
- ① アフリカの映画・テレビ番組を周りの人に勧めた
- ② アフリカの映画・テレビ番組の内容を周りの人に話した
- ③ アフリカ関連のニュースを観るようになった
- ④ アフリカ関係のNGOの活動に参加した
- ⑤ アフリカ関係のイベントに参加した
- ⑥ アフリカ関係の本を読んだ
- ⑦ 実際にアフリカに行く予定/行ってきた
- ⑧ その他



◆今後のアフリカ題材の映像に対する意見、希望

もっとも多くみられたのは、「アフリカのマイナスの面ばかりだけではなく、もっと文化や普段の生活についてみたい」という意見であった。意見の傾向としては大きく3つに分けられる。「生活・文化」「社会問題」「発展」である。「生活・文化」では、「音楽」や「食」などが含まれ、一般の生活に密着した内容を求める声が多かった。「社会問題」については、単に「厳しい現状」を見せるだけではなく、その正確さやそれに対する支援の実態など、今よりも一歩踏み込んだ内容を希望する意見が目立った。さらに、「発展」については、成長を遂げている国や都市の様子などをみたいという声があった。

〈図3〉意見傾向（選択数）



【分析結果考察】

アフリカを題材とした映像の視聴は回答者の約95%が「有」と答えており、さらにそのうちの約90%の人が「視聴によってアフリカへの関心が高まった」と答えている。もともとの関心の高さがあるにしても、それがさらなる関心や行動につながっているという結果がみられるということは、アフリカの映像がもたらすインパクトはある、と考えられる。しかし、一方で「関心が高まらなかった」という人もいるということには注意が必要であろう。また、今後のアフリカ題材の映像に求められる内容として、「マイナス面ばかりではない映像」「正確で豊富な情報の提供」が多くある。これらの声は、現在のアフリカ題材の映像の質も量も見直し、今後、アフリカの映像を提供する人々に有用な情報であると考えている。これを機に、アフリカが日本においてますます身近な地域として扱われ、この地域への関心が高まり、理解が深まっていくことを願ってやまない。

【調査実施・協力者】

調査票和文作成 : 山崎瑛莉

調査表英文作成 : 田中美結

調査実施者 : Ouattara Amadou、飯島卓也、石黒さくら、石田里沙、上杉恵理子、
田端春奈、田端麻美、天馬千穂、寺澤雪江、二上昌子、浜中咲子、
宮崎佳代子、山崎瑛莉

調査分析協力者 : 田端春奈、田端麻美

本調査にご協力いただいた来場者のみなさま、さまざまご意見をくださったアフリカ理解プロジェクトサポーターのみなさま、そしてスタッフのみなさまに心より感謝申し上げます。